

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (金曜日特別授業)

批評理論について 1

～ 非インタラクティブな「テキスト主義」の系譜

(講義第5回：2016-12-09)

担当： 石井 拓洋
takuyo.ishii@gmail.com

2016

【資料内の表記について】

- ・「」内は著作物からの引用
- ・〈〉内は専門用語、一般用語、語の強調。
- ・※印以下の記述は、石井の考えを多く含むもの
- ・[]内は、石井による補足

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の最大の変革は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編『知の技法』1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ
substantialism relationalism

- ・ 〈実体〉 substance とは

「(哲) 変化する諸性質の根底にある持続的な担い手と考えられるもの。

それ自身によって存在するもの。

世界ないし事物の実体は古来哲学の重要問題とされ、殊にギリシャ哲学・スコラ哲学・デカルト・スピノザにおいて中心的役割を演じた。

〔略〕 現在では、実体ではなく関係を事物の根底に据える考え方が盛ん

になっている」

関係論 ・ 関係主義 relationalism

- ・ 「西洋哲学の伝統的存在観においては、独立自存する〈実体〉がまずあり、次いで実体どうしの中に〈関係〉が二次的に成立すると考えられてきた。それに対して、関係こそが第一次的な存在であり、実体は〈関係の結節〉にすぎないとする立場が〈関係主義〉である」

(野家啓一 「関係」 『岩波哲学・思想事典』 278 頁)

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の 知の 最大の変革 は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ
substantialism relationalism

〈関係論〉をみちびいた契機としての
〈言語論的転回〉について

関係論をみちびいた視点 : 言語研究 から外界の関係論的なあらたな認識へ

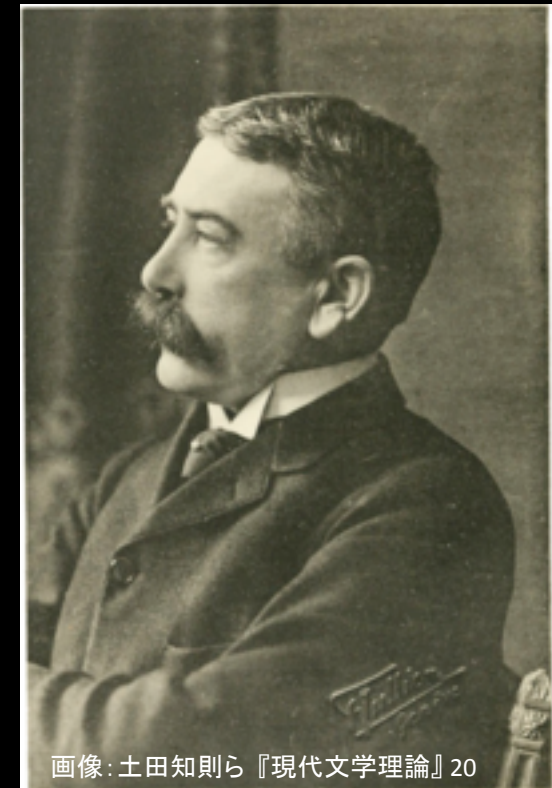
F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)

- ・「言語のシステム全体を、
音の差異と 概念の差異 とが結びついたものと
みなすことができます。

実定的に与えられた概念などどこにもありませんし、
概念と別個に 決まった 聴覚記号もないのです。

ある概念の差異をある記号の差異とつきあわせることで
一見実定的な項に似たものを得ているのです」

(ソシュール『一般言語学講義:コンスタンタンのノート』p.177)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

1900年ごろまでの言語観

ソシュール以前の考え方

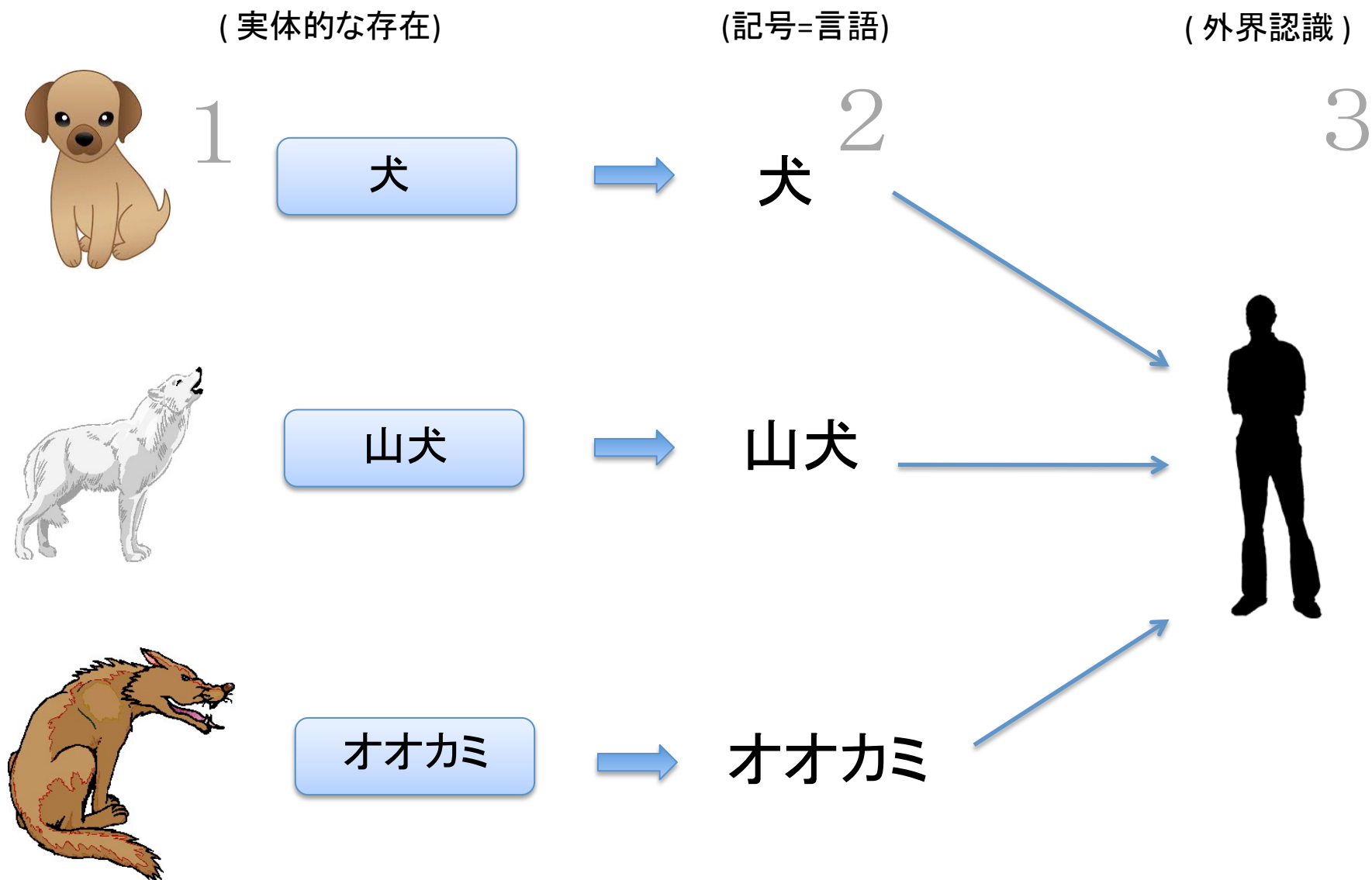
「言語名称目録観」

(実体論的な言語観)

「言語名称目録観」

ソシユール以前の外界認識モデル (実体論的な言語観)

最初に物などが存在する。
人は物にラベルをつける。
それによって外界を認識する



「貸し」という
概念が先に存在して、、、



あとで「貸し」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

(実体論的な言語観)

「借り」という
概念が先に存在して、、、



あとで「借り」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

(実体論的な言語観)

でも本当なのか？

「貸し」や「借り」の概念とは、
言葉に先立って存在するといえるのか？

以下、F・ソシュール『一般言語学講義』小林英夫訳、東京：岩波書店、1940年、163頁。より。

「貸し」概念



日本語 : 貸し

ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer

ミッテン

ルウイ

「借り」概念



日本語 : 借り

ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

ファーミッテン

ルウィ

「もし語というものが、

あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、

それらはいずれも 意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである。

ところが 事実はそうではない。

フランス語は『借りる』ことをも『貸す』ことをも 無差別に louer (ルウイ) という。

ドイツ語ならば mieten および vermieten と 言い分けるところである；

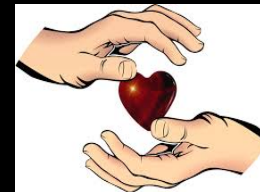
それゆえ 価値の精密な対応はない」

F・ソシュール 『一般言語学講義』小林英夫訳、東京：岩波書店、1940年、163頁。



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer



日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

※

もしも、「貸し」や「借り」などの「行為それ自体」が、
たしかに、言葉に先立って存在するのであれば、

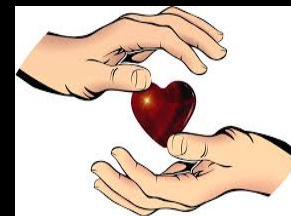
それらを、それぞれ、「違うもの」として示すために、必ず「違うラベル」が付されるはずである。しかし、国によっては、同じであったりする（「貸し」-「借り」のフランス語のように）。

なので、「物事それ自体」が言葉に先行して存在しているとは言えなくなる。

= 「言語名称目録観」 (実体論的な言語観) の否定



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten
フランス語 : louer

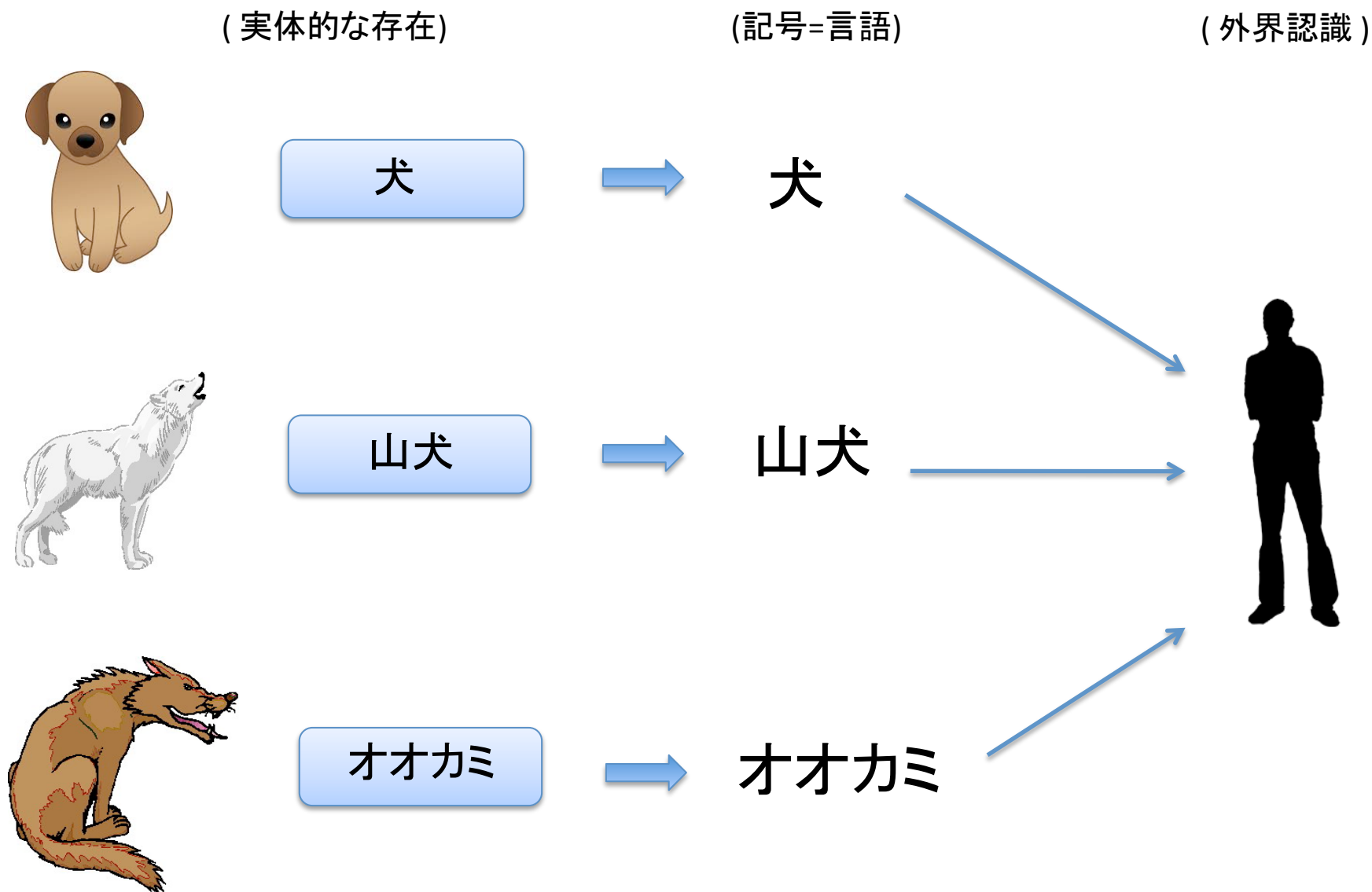


日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten
フランス語 : louer

「言語名称目録観」

ソシユール以前の外界認識モデル (実体論的な言語観)

最初に物などが存在する。
人は物にラベルをつける。
それによって外界を認識する



1910年ごろ以降

ソシュール以後の考え方 「言語論的転回」

(関係論的な言語観)

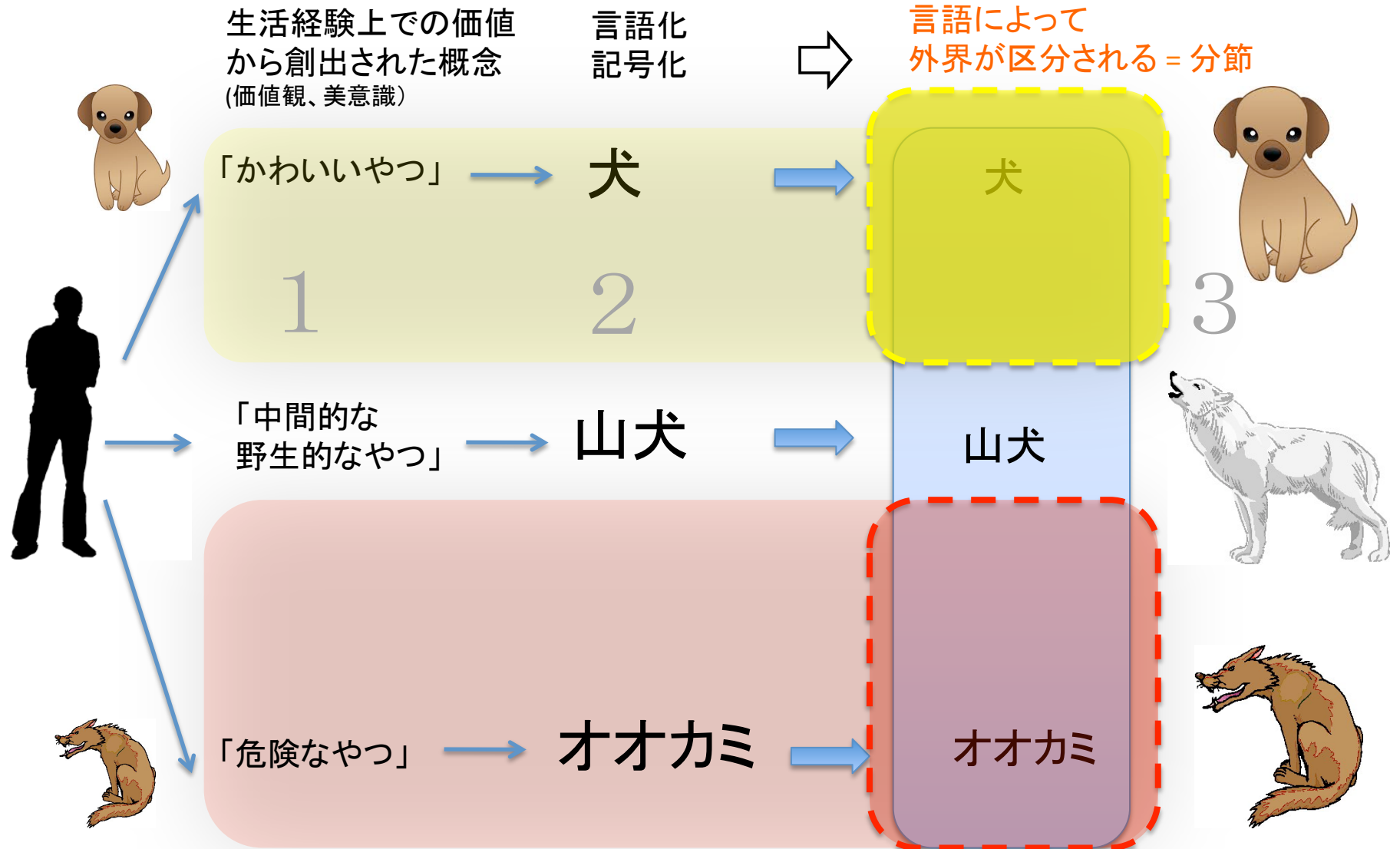
外界に存在する物事に対する命名によって言語がうまれたというよりも、むしろ、最初に言語ありきであり、言語こそが、人間にとっての外界認識をつくる、

という、世界認識方法の転回（20世紀はじめ = ソシュールによる）

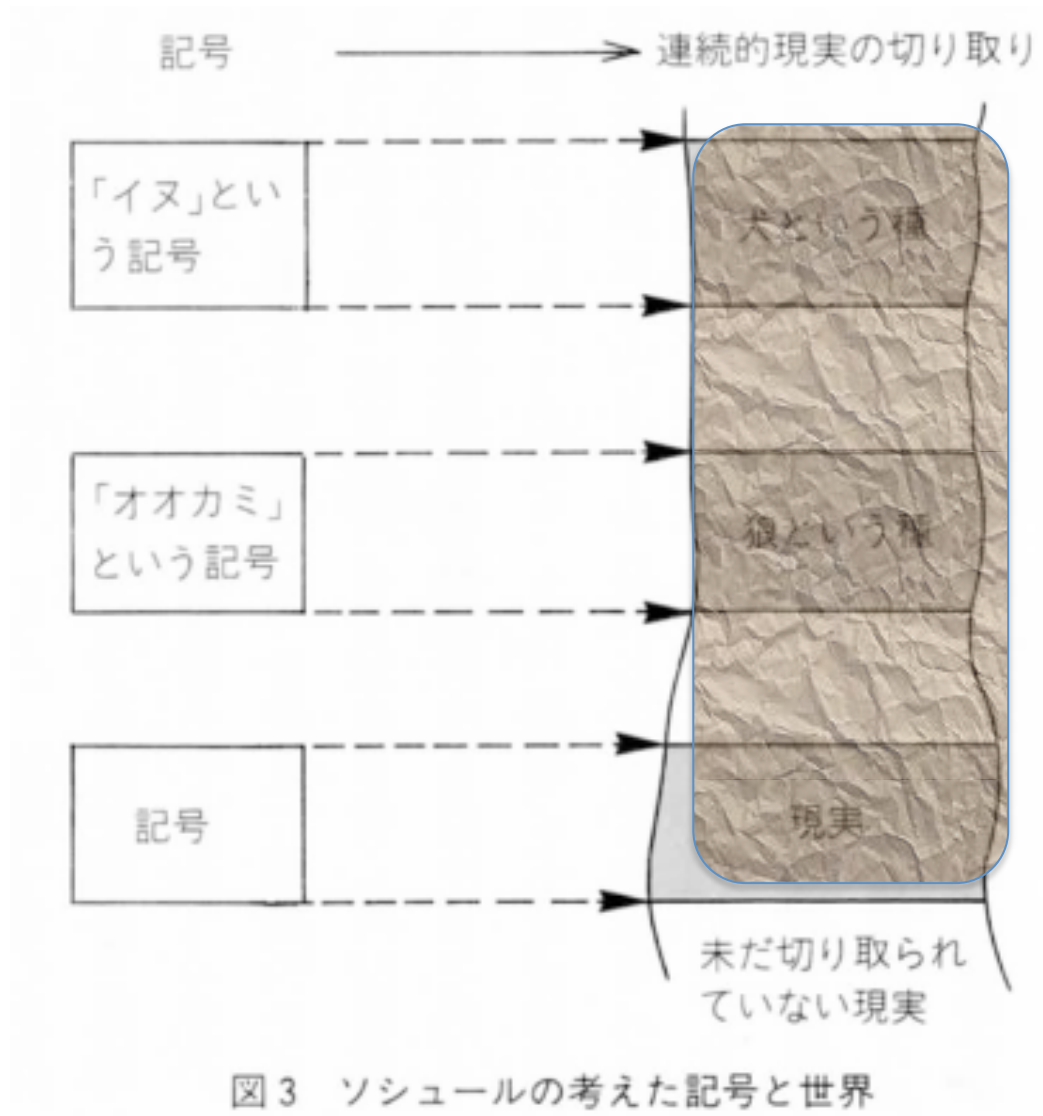
「言語論的転回」

ソシユール以後の外界認識モデル，記号論の視点（関係論的な言語観の契機）

人の価値観に基づいて本来は〈区分別のない〉外界を記号を用いて〈区分別する〉。そして外界を認識する。

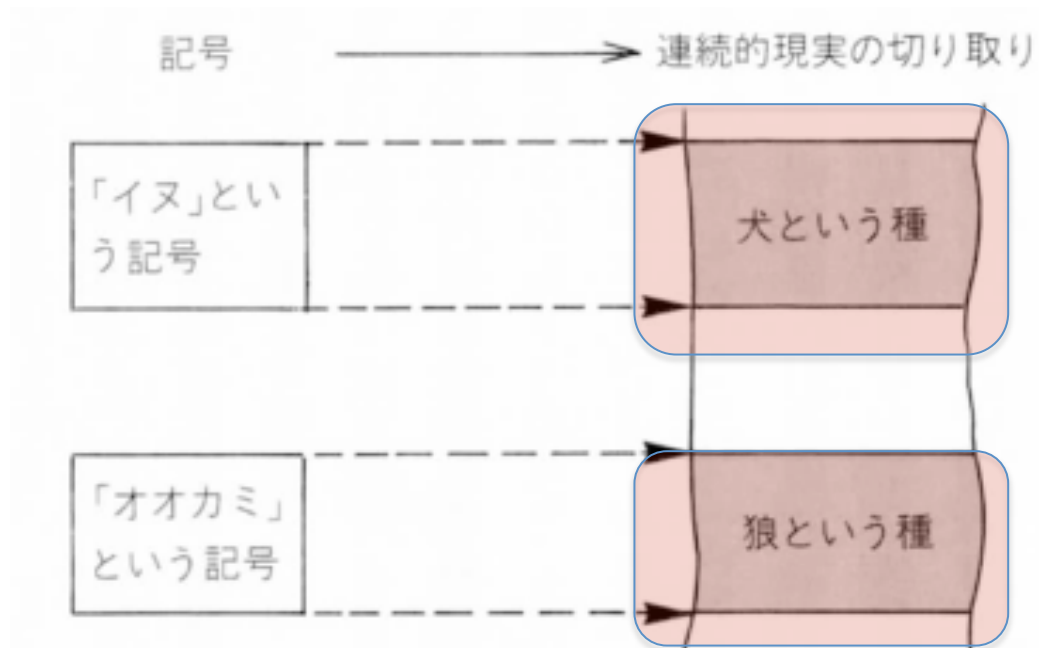


「分節」のはなし



〈イヌ〉的な生物種の
連続したつながり

本来の自然には
このような連続した
種をつながりしか
存在しないはず



連続した連なりの一部を
 「犬」などの **記号を用いて**
区分することで、
 「犬」の認識がうまれる。

価値観によって外界は区分される
 「分節」

図3 ソシュールの考えた「分節」

さらに

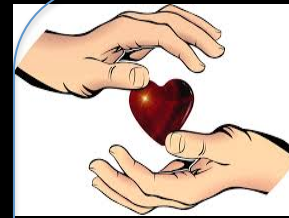
ここから言えることは、例えば、フランス人にとっては、「貸し」も「借り」が個別に存在しているのではなくて、両者は同じ行為に思えた、ということではないか。

つまり、「貸し」や「借り」の区別して、それぞれを別個の概念を作り上げるのは、言語と考えることも可能。

フランス語 : louer



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten



日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten

言語は
関係性（差異）のみによって
成り立つ

言語「犬」

と

これ



とのつながりは？

表現記号
シニフィアン

表現内容
シニフィエ

言語 「犬」
イヌ

と これ



とのつながりは ?


まったく必然性はない (恣意的である) 。
なぜなら、地域ごとに様々な〈つながり〉方が存在するから。

表現記号	dog (英)	chien (仏)	hund (独)	cane (伊)	собака (露)
	ドッグ	シアン	フント	カーネ	サバーカ
表現内容					

表現記号 (シニフィアン) と 表現内容 (シニフィエ) とのつながりは「恣意的」である。

そしてまた、

ほかならぬ 「いぬ」 という言葉の「音」を 定義するとしたら？

ほかならぬ  という「概念」を 定義するとしたら？

これらを、ほんとうに、実体論的に定義できるものだろうか？

音の差異

概念の差異

(関係論的な言語観)

「いす」×

「いと」×

「きぬ」×

「いぬ」

「いに」×

「しぬ」×



これではなく



これ

「シニフィエ」
記号内容

「シニフィアン」
記号表現



これでもなく



言葉においては
「音」も「概念」も 他との関係による「差異」によってしか示すことができない

「言語とは差異の体系である」



図

地

図が存在するためには
図ではないもの (地) が必要

図 (?)

地がなければ (図としての差異をつくるものがなければ) 、
図は図として存在できない

関係論をみちびいた視点 : 言語研究から外界の関係論的なあらたな認識へ

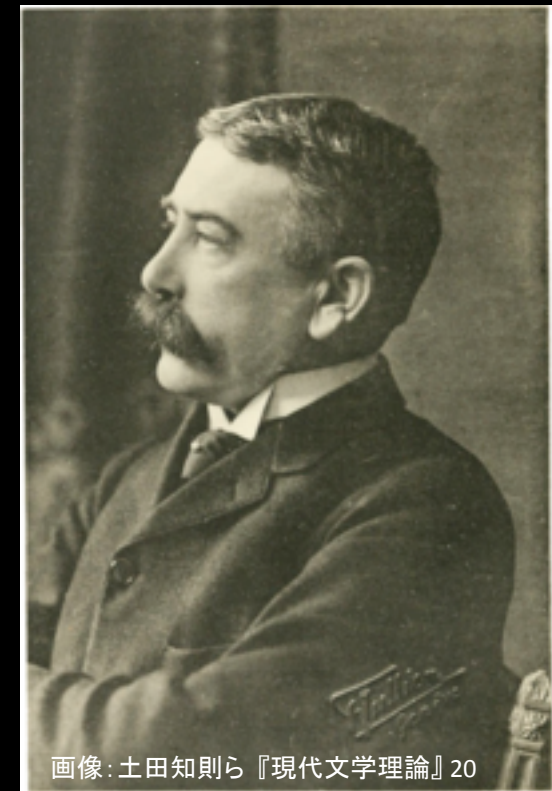
F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)

- ・「言語のシステム全体を、
音の差異と 概念の差異 とが結びついたものと
みなすことができます。

実定的に与えられた概念などどこにもありませんし、
概念と別個に 決まった 聴覚記号もないのです。

ある概念の差異をある記号の差異とつきあわせることで
一見実定的な項に似たものを得ているのです」

(ソシュール『一般言語学講義:コンスタンタンのノート』p.177)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

批評理論の概観

「テキスト主義」か、「コンテキスト主義」か？

または、作品の価値を判断すべきは

「作品自体」にか、「社会との関わり」にか？

なぜ、ここで 批評 criticism にふれるのか ？

作品制作に活かすための批評理論の理解

- 「文化的成果物」(作品、テキスト)が
いかなる視点から読まれてきたかを知るため
- 〈作者〉 や 〈作品〉 に対する認識の拡張を図る
- 批評理論から作品制作コンセプトへの可能性追究
- 知っておくべき専門教養のため

なぜ、〈文学〉の批評なのか ？

〈言語論的転回〉を無視できないため

- 〈記号〉が 外界の認識をつくるから
- 〈記号〉の中でも、〈言語〉が、十全にその機能を果たすから
- 「文化は言語である」 (≠ 言語は文化である) 池上嘉彦

「さまざまな文化的対象や現象の中で、言語が特権的な地位を占めるものとして意識されている
ということ —— つまり、『文化は言語(のようなもの)である』と捉えられうるということ ——
は十分に明らかであろう」 (池上嘉彦『記号論への招待』30頁。)

文学批評史概観

「作品自体」か？ 「社会との関わり」か？

「テキスト主義」

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テクスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

文学批評史概観

「作品自体」か？

「テキスト主義」

「社会との関わり」か？

「コンテキスト主義」

- ・ 19世紀末：英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の「文学講座」ができる
- ・ 19世紀末：印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評（コンテキスト主義的）
- ・ 1910年頃：〈ロシア・フォルマリズム〉の批評（テキスト主義）ヨーロッパ
- ・ 1920年～50年頃：〈新批評〉（テキスト主義）アメリカ
- ・ 1950年～70年頃：〈構造主義批評〉、〈テキスト論〉の批評（テキスト主義）仏、米
- ・ 1970年～：〈受容理論〉、〈読者反応批評〉（コンテキスト主義）独
- ・ 1980年～：〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉（テキスト主義？ コンテキスト主義？）仏、米
- ・ 1990年～：〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉の系譜（コンテキスト主義）英、米

「テキスト」と「コンテキスト」

テキスト text

「なん人かによって そこから意味がよみとられることによって、一個の『表現体』」
となるもの。 (池上嘉彦『記号論への招待』29頁)。

「ある作品の本文。〔中略〕最近はとくに、作品 (work) という言葉があらかじめ
作者を予想させるために、作品という語を避けて、より中立的な テキスト の語を
使うことが多い」 (川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

コンテキスト context

「『文脈、前後関係、背景』の意」 (川口喬ら「コンテキスト」『最新文学批評用語辞典』202頁)。

〈ロシア・フォルマリズム〉の批評 : 1910年頃～1920年頃

言語は新たな外界認識をつくる : 言語の「詩的機能」

「テキスト主義」

- ・ 印象批評や道徳批評の 非科学的側面を批判
- ・ 「コンテクスト主義」 を 還元化
- ・ 言語の機能や技法にのみ着目 — ローマン・ヤコブソン (1896-1982)
- ・ **〈異化効果〉** : 日常的な受容 (自動化) を避け、新たな受容をうながす言語表現
例) 「 焰のつらら」、「四角い地球」、「ダイヤの溶解」

「対象を見慣れぬものにし、形式を複雑にし、知覚のプロセスをより長く困難にすること」
シクロフスキー

〈新批評〉 new criticism : 1920年頃～1930年頃

作品それ自体を対象とした批評

「テキスト主義」

- ・ 作家の伝記的背景、社会的背景を考慮しない。
- ・ 純粹に、作品それのみを批評対象とする。
- ・ 「意図に関する誤謬」と「情動に関する誤謬」： 作者の意図や情動を排除
- ・ ウィムザットと ビアズリー が主唱者。 アメリカ南部文学から拡大する。
- ・ ただし人間が理性的に統一されたものとする前提にもとづいた批評（F、ジェイムソン）。1960年代以降の〈構造主義〉による主体性批判において疑問視される。

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト Roland Barthes (1915-1980、仏)

- 思想家、批評家。
- ソシュールの言語観を継承し、批評活動をおこなう。



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト 『作者の死』(1968)



「〔作者が〕仮に自己を表現しようとしても、、、
彼が《翻訳する》つもりでいる内面的な《もの》とは、
それ自体、完全に合成された一冊の辞書にほかならず、
その語彙は他の語彙を通して説明するしかない。
それも無限にそうするしかない」(p.86)

→ 作者や作品が、脱中心化し、関係論的に認識されている

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



作者は、自己の創造性のみによって創作するものでもなく、したがって、自らの作品の意味を保証するような中心的・優先的な立場とはならない。

「テキストとは、無数にある文化の中心からやって来た引用の織物である」(pp.85-86)

「一編のテキストは、いくつもの文化からやって来る多元的なエクリチュールによって構成され、これら、、、は、互いに対話をおこない、他をパロディ化し、異議をとねえあう。

しかし、この多元性が収斂する場がある。その場とは、、、作者ではなく、読者である。読者とは、あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空間にほかならない。

あるテキストの統一性は、テキストの起源ではなく、テキストの宛て先にある」(p.88-89)

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

ロラン・バルト『作者の死』(1968)



「読者の誕生は、『作者』の死によって
あがなわれなければならないのだ」 (p.89)

「作者」の中心性・優越性が失われ、一方で、
「読者」こそが、作品から多様な意味を生み出しうる場となる。

→ 「創造的読み」が許された読者の誕生。作品の創造に参加する「読者」。

〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 _ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



〈テキスト論〉 : 1960年～70年代 _ 「作者の死」と「作品からテキストへ」

ロラン・バルト 『作品からテキストへ』(1971)



作者が意味をつくる「作品」から、読者が意味をつくる「テキスト」へ

「作者は作品の父であり、所有者であると見なされる。
それゆえ、、、文学の科学は、作者の原稿や表明された意図を尊重する」(p.99)

『テキスト』は、その父親の保証がなくても読むことができる。、、、

『作者』が、、、自分のテキストの中に、《もどれ》ないということではない。
ただ、そのときは、いわば招かれた客としてもどるのだ。

彼〔※ = 作者〕の記名は、もはや特権的、父性的、真理論的なものではなく、
遊戯的である。彼はいわば紙の作者になるのだ。彼の人生は、、、一個の創作となる」
(p.100)

〈テクスト論〉 : 1960年～70年代_「作者の死」と「作品からテクストへ」

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

物語の構造分析



モノガタリノコウゾウブンセキ
ロラン・バルト著, 花輪 光訳 (BARTHES, ROLAND.)
東京: みすず書房, 1987
[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp)で詳細を見る

この本に以下が収録

- ・「作者の死」
- ・「作品からテクストへ」

ブックマーク

● 所蔵 :

	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 <input type="checkbox"/>			相図: 開架	954 B25	158313		<input type="button" value="予約"/>	0	

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク

主な参考文献・さらなる知識のために

(準備中)

以上